

## 社会的にみた看護

—看護の将来像—

伊藤博康

△はじめに▽

医者でも看護婦でもない私が、一体どういふ立場で看護の問題を取り上げようとするのかを少し述べておきます。まず第一に、私が生涯の研究課題として取り組んでいる公衆衛生学を踏まえた保健学・医療社会学・社会医学の中で「人間」というものについて、社会学的に研究したいと、昭和四十七年秋頃から考え続けてきました。というのは、昭和四十七年七月一日から、国家公務員共済連合会虎の門病院で、看護助手のアルバイトをはじめ、医師と看護婦、看護婦と患者、その他のパラメディカルスタッフ等の人間関係というものに興味を覚えたからである。この論文は「医療社会学」という分野の中で視点をしぼり、人間の媒介が不可欠である「看護」についての研究と将来の予想（予測）を考えてみようと思ひ、タイトルを『社会的にみた看護』とし、サブタイトルを「看護の将来像」としました。

△本文▽

日本の看護婦が日本の精神風土の上に定着したのは、日清戦争以後である。看護婦養成機関が増加して、キリスト教関係だけでも、十二、生徒数二六三人を数えるが、本郷の私立博愛看護会や中央看護婦会など、一般の私立看護婦会も増えたのは需要が増えた証拠である。明治三十年前後の看護婦の報酬は、日当で一等九十銭、二等五十銭、三等三十銭、伝染病の場合は、一等一円、二等七五銭、三等五十銭程度となっている。月収は上等二十

円、中等十円、下等三円とかなり開きがあるが、これは正規の看護婦でないものを含めた相場らしく、看護学校や養成所を出て正規の資格をもっていれば、女一人で食べてゆける職業であった。

日本は、明治十九年十一月、万国赤十字条約に加盟、翌年五月、日本赤十字社が発足し、赤十字看護婦が誕生したのは、明治二十三年である。日本赤十字社は、この年から看護婦の養成にのり出し、十五人が巣立った。彼女たちは、我国で最初にスカートをはいた職業婦人であった。

日清戦争開戦後間もなく、日本赤十字社は、戦時救護要員として、「白衣の天使」の陸軍病院への派遣を申し入れたが、陸軍側からことわられた。再三の交渉の末、八人の「白衣の天使」を広島島の陸軍病院へ派遣することが許され、彼女たちは、戦地から送還される傷病者の救護に文字どおり、「仁と愛」をそそいだ。そこではじめて、「白衣の天使」の真価が、広く認識されるに至ったのである。

明治の看護婦の歴史は、一口に言えば職業として社会的に確立するまでの苦闘時代である。二つの戦争（日清・日露）でイメージアップされた日赤看護婦はともかくとして、民間では、一方で献身的活動が当然のように期待されるとともに、他方では興味本位の風聞がまきちらされ、洋装に対する反感が新時代の職業に対する反感と入り混じって彼女たちを苦しめた。患者として手当を受けるときだけは余儀なく恩恵に甘んじるが、平生は一家の嫁として受け容れるにはふさわしくないような、独立性を感じさせる目に立つ職業であった。技術に生きよとする女の道は常にこうした目で見られたのである。

又、当時一般的だった無資格看護婦に対する世間の軽蔑や偏見を打破するために、人格識見の向上を看護婦の資格の重要な条件として揚げ、学術試験だけでは不十分で、品格精神の充実が必要だと主張しているのである。当時の男の社会がどんな目で看護婦を見ていたかを知れば、主張が現実的であったことがわかるのである。偏見の第一は、女だてらに見知らぬ男に付添って看護などするのはゆきすぎで、大胆きわまる行為であり、良家の子女のすべきことではないという考え方である。第二に、教育を受けた看護婦が巣立つまでは、付添婦、看病人が

看護婦の名前で通っていたので、実際にやっていることは雑用に毛の生えた程度だし、職業意識もあまりなく、態度や振舞にも欠けるところが多かったのである。これが一般的な看護婦のイメージを形成して世間の尊敬を得ることができなかつたのである。

第二次大戦後、職業人としての看護婦が日本において、どのように形成されていったかを(一)、労働者意識(つかわれてゐる者のみの考え方)と、(二)、職業意識(つかう者、つかわれる者との連帯感)について、簡単にまとめ、日本人看護婦の将来像を考えてみた。労働者意識については、北から南へと自分の技能を切り売って一年ごとに移動する渡り職人的な看護婦、女という特性で結婚したらやめる、自分一人の生活、サラリーマン根性(病院スト)など、悪しき意味での労働者意識が強いのである。良い意味での労働者意識は、戦前の万能型看護婦の職業意識にささえられているところにあるのである。職業意識については、専門性が増し、看護婦に資格(正・准)ができ、自分より代人人がいない時、一般的に、職業意識が強くなるが、代人人がいると職業意識がうすくなり、事実、多く看護婦がいるとさぼったり、欠勤が多く、仕事にあきてくるのである。故に看護婦は定員より少ない方が、忙しすぎると文句をいうが、使命感にかられてよく働くのである。戦前は、女の職業が少なく看護婦は自分たちだけしかできないという職人氣質があり、職業意識が強かつたのである。現代のように数ヶ月、一年又は二年でやめず、十年以上あるいは一生を看護婦で通す人がいたのである。しかも、職業意識が、アメリカ的でなく、日本的だったのでよかつたのである。それは、人間の看護をいつも心のどこかにおいて、仕事をしていたということである。アメリカの看護婦は、専門性が高いので職業意識も強いのである。日本は、アメリカの看護婦をまねようとしているが、私は賛成できないのである。四年制の大学および修士まで学ぶことはいいのだが、人間味ということに、ものすごく欠けるのである。スペシャリスト・テクニシャンとして、患者を単なる「もの」として扱い、いかに速く仕事を回転させるかで、又、いかに病院の利益が上るかという実利的なことに専念しているからである。日本のような人間の看護がアメリカには少ないのである。

以上のことから、日本人の看護婦に望むことは、四年制の大学なり、大学院を出たとしても、日本女性としてのやさしさと奥床しさをいつまでも忘れずに、ハリコウバカVであって欲しいと思う。医学のことをよく知っているからといって、それを鼻にかけることのない、奥床しさを持った看護婦こそ日本人看護婦の将来像であり、患者はもちろんのこと、日本国民のすべてが望んでやまないことなのである。故に、専門職、専門性が確立すればするほど、看護婦の自覚が大切になるのである。アメリカのように専門職におぼれてはいけなないのである。古い意味での女らしさというものを現代女性にどうすれば求められるかというところ、今、この患者が何を必要としているかを察し、感じとることが何よりまして大切なことなのである。これは頭が良い、悪いの問題ではなく、古くから伝わる日本人女性としての伝統なのである。その良い伝統を自分の中に見出すことこそ、大切なのである。それは、日本人女性なら誰しもが持っているものなのである。それを実践に移して患者を介助すること、そして、人間性をとりもどし、かつ、聖職意識をもつこと、これが日本人看護婦の将来像だと考える。

### △むすび▽

以上、看護婦というものを通して医療という世界に足を踏み入れた。これまで看護というものを中心に述べてきたが、これからの私の研究は、一般人からみた、一般人を中心とした、公害に悩まされ続ける日本人の医療の問題を中心に研究しようと思つているのである。医療の問題といつても、社会構造なり、国の文化などを踏まえた、健康問題を中心に、地域医療、公衆衛生を考え、日本人の保健観について社会学的に考察しようと思つているのである。

なぜ、このようなことを考えるかというところ、病院に勤務して、すでに病氣にかかった人ばかり見てきたからである。これからの社会（世の中）では、健康で社会生活をしている健康人に立場をおいて、健康人の健康を守ることに視点をおかねばならないと思うのである。すなわち、健康な人の健康を守り、さらに増進するため

には、どうしたらよいかという方向に研究を發展させていかねばならないのである。そして、万一病氣になつたならば、それからの回復、社会への復帰と一貫した一連のシステムとして確立してゆかねばならないのである。このことが、公衆衛生学を踏まえた医療社会学であり、社会医学であり、私の生涯研究課題なのである。

△参考文献▽

- |              |         |      |          |
|--------------|---------|------|----------|
| 「明治女性史 中の後篇」 | 村上 信彦 著 | 理論社  | 昭和46年4月  |
| 「日本の女性」      | 岡 満男 著  | 大和書房 | 昭和41年11月 |
| 「現代の職業と労働」   | 八木 正著   | 誠信書房 | 昭和47年1月  |
| 「看護の思想」      | 青木 茂著   | 医学書院 | 昭和41年4月  |
| 「看護の中の人間」    | 大段 智亮 著 | 川島書店 | 昭和47年5月  |
| 「現代日本医療史」    | 川上 武著   | 勁草書房 | 昭和40年2月  |
| 「日本医療労働運動史」  | 富田 次郎 著 | 勁草書房 | 昭和47年6月  |